

WINDS CAFE 247  
【打楽器百花撩乱 IV —狂想変容—】  
會田瑞樹（打楽器）

ゲスト：伊左治直（作曲、パフォーマンス）、三浦礼美（笙）

第一部《独奏ヴィブラフォン新作三題》

露木正登：ファンタジア（即興曲）（2016/17,世界初演）

森田泰之進：Bumpy Jampy(2017,世界初演)

白藤淳一：あやかしの余韻（2017,世界初演）

第二部《ヴィブラフォンの夢》

藪田翔一：祈りの森 ～回想曲～(2017)

Yohanan Chendler：twilighting for solo Vibraphone(日本初演)

J.S.バッハ（白藤淳一編曲）：イギリス組曲第2番より「サラバンド」(BWV807)

伊藤巧真：逆ヨタカ／借景池泉回遊式（2014）

第三部《奇想曲、アンティキティラ ～伊左治直の世界～》

伊左治直 アンティキティラ(2015)

伊左治直 アンティキティラ II -鳥と潜水夫- (2016)

2017年07月23日(日)

カーサ・モーツァルト

會田瑞樹（打楽器、ヴィブラフォン）

1988年宮城県仙台市生まれ。武蔵野音楽大学ヴィルトゥオーソ学科打楽器専攻卒業、同大学院修士課程修了。佐々木祥、星律子、吉原すみれ、神谷百子、有賀誠門、藤本隆文の各氏に師事。日本現代音楽協会主催第九回現代音楽演奏コンクール「競楽IX」第2位入賞。デビューアルバム『with...』は朝日新聞夕刊推薦盤、音楽の友12月号推薦盤に選出。2016年12月にはNHK-BSプレミアム「クラシック倶楽部」において會田の演奏を一時間に渡って特集した「打楽器百花撩乱 Percussion Extraordinaire -Mizuki Aita-」が全国に渡って放送された。2017年6月、ALM コジマ録音よりセカンドアルバム「ヴィブラフォンのあるところ」をリリース。アルバムはレコード芸術特選盤、朝日新聞をはじめ各所より大きな反響を得ている。

## 第一部《独奏ヴィブラフォン新作三題》

露木正登 作曲

ファンタジア(即興曲)(2016/17,世界初演)

2016年の夏、いったん初稿を書き上げたものの、2017年2月から5月末にかけて曲全体を見直し、楽譜に修正を加えて決定稿とした。演奏者から「できればグリーンスリーブスを引用してほしい」という難しい注文がついて、私の音楽とは相容れない「グリーンスリーブス」とどのように音楽的折り合いをつけるか、その方法を見つけるのにかなりの時間を費やした。結局、「グリーンスリーブス」の旋律のリズムだけを借用して、特徴的な音型や音の動き（上行する旋律線）などは残したまま、あとは自由に書くことにした。

曲は単一楽章で、a) 序奏 (Passagio) b) 主題（「グリーンスリーブス」の提示）と b1) から b4) までの即興的な変奏部分、そして c) Coda (Passagio の省略された再現) から構成されている。(露木正登)

作曲を浦田健次郎氏に師事。1995年第6回朝日作曲賞(吹奏楽)受賞。2000年第3回国立劇場作曲コンクール佳作。2001年第12回吹田音楽コンクール作曲部門第3位入賞。2015年6月に初演された《トリプティック〜サクソフォン四重奏のための(2015)》の楽譜とCDが、ブレーン(株)より出版・発売されている。

森田泰之進 作曲

Bumpy Jumpy(2017,世界初演)

「毎日暑いですね～。何か聴いて涼しくなる音楽ってないもんですかね」

そんな会話をしていたら、ある人がジャズヴィブラフォンのカル・ジェイダーの音楽を薦めてくれた。緩めのリズムに乗せて流れる、軽く伸びやかな響きは確かに夏向き。以来、夏に涼を感じる楽器といえばヴィブラフォンを思いつく。

ところが、いざこの楽器のために新曲を書くとなるとなぜかそのイメージ通りにいかない。楽想は清涼感からどんどん離れてゆき、凡そヴィブラフォンらしくない、南国の密林の奥から聞こえる民族音楽のような仕上がりになった。

夏らしい「暑さ=熱さ」をお楽しみいただきたい。(森田泰之進)

作曲を松平頼暁、Frédéric Durieux の各氏に師事。2002年日本現代音楽協会新人賞、2003年日本交響楽振興財団作曲賞特別奨励賞、2009年ヴァレンティノ・ブッキ賞(イタリア)、2013年 ISCM 世界音楽の日々(ウイーン)入選。2017年 ISCM バンクーバー大会で「音ノ輪 II」演奏予定。http://www.facebook.com/yasunoshin.morita

白藤淳一 作曲

あやかしの余韻(2017,世界初演)

作品のタイトルは、夢野久作氏の「あやかしの鼓」から引用したもので、この小説(私の手元にあるのは夢野久作怪奇幻想傑作選、角川ホラー文庫)は陰気な音「ポ・・・、ポ・・・、ポ・・・」を出す鼓がきっかけで、正体のわからない恐怖が巻き起こる様を描いた作品であり、それを、中心音がわからない焦燥感(ホラー?またはフィアレス?)として私なりに描いたものです。ただし、私には恐怖&焦りを主眼としたつもりですが、それがつもりか否かは、聞いて頂いた皆様の、鼓膜の余韻しだいなのかも・・・・・・? 痴れません。(白藤淳一)

1981年岩手県花巻市出身。岩手大学大学院修了。日本クラリネット協会主催クラリネット作品コンクール入賞。第80回日本音楽コンクール作曲部門入選。2016年岩手県農林水産部からの依頼により「おこめきょうだいの歌」を作曲。ヴィブラフォンの為の編曲は、ヘンデル/メヌエット:ト短調、エルガー/エニグマ変奏曲より「ニムロッド」、スクリャービン15つの前奏曲作品16より第3曲、ベートーヴェン/ピアノソナタ第30番作品109より第3楽章、等がある。

## 第二部 《ヴィブラフォンの夢》

菽田 翔一 作曲

祈りの森 ～回想曲～(2017)

この曲は約 50 分からなるヴィブラフォンとパイプオルガンの組曲「祈りの森」よりヴィブラフォンソロの箇所の抜粋になります。

この回想曲は、ヴィブラフォンで奏でる祈りの歌です。(菽田翔一)

Yohanan Chendler 作曲

twilighting for solo Vibraphone(日本初演)

アーバン辞書の中の「twilighting(夕暮れ)」の解説は、「1/2 の目覚めと 1/2 の睡眠、あるいはあなたの周囲を完全に意識していないもの」と記述されている。この作品は 2014 年、私が日本に引っ越して最初に作曲した作品である。引っ越してまもないこともあってか、作品の随所には横浜の深夜の街の音が散りばめられている。2014 年にカリフォルニアでの初演の後、日本での初演の機会を与えてくれた會田氏に感謝の思いである。(Yohanan Chendler)

J.S.バッハ(白藤 淳一 編曲)

イギリス組曲第 2 番より「サラバンド」(BWV807)

このところの興味の一つに「編曲」というジャンルがある。特に、白藤淳一氏によるヴィブラフォン独奏のための編曲作品はかなりの数に達しつつある。ほとんど毎日のように白藤さんからかかってくる電話の、他愛もない雑談からいくつもの編曲作品は生まれた。僕がけしかけたり、白藤さんが題材を持ってきたり...

白藤さんの住む花巻の風土は、今もお穏やかで、たおやかなみどりが広がっている。電話口からはいつも、様々な音が聞こえてくる。彼はそういう自然界の「音楽」を、ほとんど意識することもなく耳に聞きながら、バッハをヴィブラフォンのために響かせる術を、僕に与えてくれたのだった。(會田瑞樹)

伊藤 巧真 作曲

逆ヨタカ／借景池泉回遊式 (2014)

本作品はヴィブラフォンを借景とした音の庭であり、福島県会津若松市にある御薬園の作庭技法(借景池泉回遊式)を参考にして制作されている。御薬園の中心にある楽寿亭から彩りのある景観を 360° 楽しむことができるように、ヴィブラフォンを中心に据えながら、5つの性格の異なる小品を回遊する。會田瑞樹パーカッションリサイタルのテーマの1つである「打音の視界」を多角度から展望し、ヴィブラフォンの可能性を探っていく。

～ヨタカについて～

草野心平が描いた「カエル」や宮沢賢治が描いた「ヨタカ」のような生き方に想いを馳せることが増えたように思います。彼らはいずれも虐げられたものの象徴であり、彼らは彼らなりの言葉をすでに知っているかのようです。自分自身も、以前に比べて“なぜ、わたしはわたしなのか?”という「問い」を強く抱くようになり、作曲行為を通してその「答え」を模索するようになりました。作曲行為の中で自己同一性を模索していくために、自分や楽器にあえて「別の個性(そして、それは毒性のあるもの)」を強制的に注入してみようと思いました。そのショックに抵抗する自然な反応こそ、自分自身や楽器自身の本来の声に限りなく近いと考えるようになりました。(伊藤巧真、2014年初演時のプログラムノートより転載)

## 第三部 《奇想曲、アンティキティラ ～伊左治直の世界～》

### 伊 左 治 直 作曲

### アンティキティラ (2015)

アンティキティラとは、ギリシャの島の名前である。だが、この島の名前が知れ渡りようになったのは、1901年に沈没船の中から、古い円盤や歯車の、不思議な機械の断片が発見されたことからだった。現在では、この機械は天体の運行やカレンダー（閏年を含む）などの、想像以上に精巧な機能を持っていることがわかったが、それと同時に、その機械は紀元前100年以上も前のものであることがわかり、今尚、多くの謎を含んでいる。

今回の作品の中心的な楽器はスネアドラムやロートトムであるが、それらは「やや機械化された円盤状太鼓楽器」として私の中で結びつき、このアンティキティラとの繋がりを感じた。それは、リズムや楽器類のメカニカルな組み合わせだけではなく、海の深さや紀元前から現代に続く時間のイメージのようなものも含んでいる。というのも、このアンティキティラの発見と研究には、たとえば潜水技術の歴史といったサブストーリーも、音色のイメージとして重要な視点であったからだ。

昨年12月に會田瑞樹さんにより委嘱、初演された。また、昨年5月頃には打楽器と笙のための作品委嘱の話が既があり、それらも予め考慮されていた。この「アンティキティラ」の打楽器シリーズには、まだまだ可能性を感じていて、今後も継続したいと思っている。（伊左治直）

### 伊 左 治 直 作曲

### アンティキティラII -鳥と潜水夫-(2016・委嘱新作)

笙という楽器は、伝説の鳥である鳳凰の姿形と天界の音がイメージされている。また打楽器については、ソロであるシリーズ前作同様、その音世界には、大地や海の深部を感じさせる。とすれば単純に、「鳥＝笙、潜水夫＝打楽器」の物語となるが、もうひとつの解釈によってその形態は入れ替わる。たとえば笙の演奏の仕草とは言えば、両手を口元に当て、潜水のシュノーケルを装着するようでもある。あるいはまた、まるで噂話や秘密の言葉をそっと打ち明ける通信機のようにも見える。片や打楽器は笙とは違い両腕が自由だ。海底で何かを発掘するようにも見える一方で、鳥のように両腕が羽ばたくこともあるだろう。つまり、「鳥」と「潜水夫」はしばしば逆転するのである。

そして、その距離感や関係性の曖昧さを強調させるのが「助演」の存在である。助演は黒子のようなものである。「目に見えてはいるが“見えないもの”」として扱われる。それはまた「聴こえてはいるが“聴こえないもの”」でもある。

この作品は、笙と打楽器の2名のみでも演奏可能ではある。ではあるのだが、ここに余計な（耳障り、目障りな）異分子の存在があることは、時として音楽形成には大切であると感じている。そしてそれは音楽に限らず、実社会においても同様に大切であるとも、感じている。（伊左治直）

### ゲストプロフィール

●伊左治直（いさじ・すなお）：現代音楽系の作曲、パフォーマンスや即興演奏から、ブラジル音楽や昭和歌謡曲などのライブまで様々な活動を展開している。また、サッカーや映画、日本史、民俗学の愛好家でもあり、それらの興味は作曲へ強く影響を与えている。

打楽器合奏曲に《南蛮トリプル》（国立音大委嘱）《南蛮夜曲》（パーカッション・ミュージアム委嘱）等がある。これまで芥川作曲賞、出光音楽賞等を受賞。作品集CDに《熱風サウダージ劇場》（FOCD2565）がある。なお、頻繁に間違えられるが、「伊佐治」や「伊左地」でなく「伊左治」が正確な表記である。<http://composerworklist.wixsite.com/composerworklist/sunao-isaji>

●三浦礼美（みうら・れみ）：国立音楽大学卒。笙を宮田まゆみ、豊英秋各氏に、雅楽合奏を芝祐靖氏に師事。「伶楽舎」の一員として国立劇場、薬師寺最勝会復興上演、サイトウキネンフェスティバル松本、サントリーサマーフェスティバル、ULTIMA音楽祭、HOLLAND FESTIVAL、MFJ USAコンサートツアー等、国内外の公演に多数出演。

2010年パリオペラ座、2012年モントリオール グランバレエにてバレエ「輝夜姫」公演に出演。2015年にはフランクフルトにてアンサンブルモデルンと共演。近年は学校公演事業にも力を注ぐ。NHK邦楽番組出演の他、TV、CD等の録音も多数。ムサシノ雅楽教室、福島雅の会講師。

[http://www.sakura-project.com/prof/miura\\_remi.html](http://www.sakura-project.com/prof/miura_remi.html)